目次
2面
3面
4面 秋季リーグ&インカレ
5面 スポーツ・デー 筑波レガッタ 他
6面 天皇杯&柔道部

剣道全日本インカレ 筑スポ 男女アベック優勝!!

男女そろって日本一!

10月23日、日本武道館で第59回全日本学生剣道優勝大会（以下、全日本大会）が開催され、本学剣道部男子が、日本一に輝いた。全日本大会での優勝は、9年ぶり10回目となる。2週間後の11月6日には、男子に引き続いて女子が愛知県春日井市総合体育館で行われた全日本女子学生剣道優勝大会（以下、全日本女子大会）で、栄冠を手にし、男女アベック優勝を果たした。

女子は、2年前と3年前に同大会を2連覇している。昨年はV3に期待がかかっていたが、3回戦敗退という衝撃の結果に終わっていた。しかし今回、見事にその雪辱を果たし、通算8回目の優勝を飾った。

男子 9年ぶりのV

前年度王者を制す

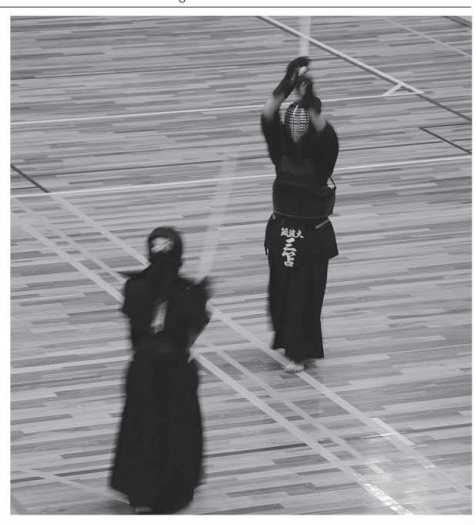
全日本大会で大将を務めた男子主将の村上雷多選手（体育4年）は、「3回戦突破の際に優勝への手応えを感じた」と言う。3回戦では、前年度優勝校の早稲田大学と対戦し、村上選手が代表者戦の末、勝負を決めた。

同大会のルールは、7人ずつの団体戦で、5分間3本勝負。勝敗が決まらなければ引き分けとなるが、最終的に団体単位で勝者数と取得本数が共に引き分けた場合、時間無制限で1本勝負の代表者戦が行われる。つまり、代表者戦は勝敗を決する重要な試合であり、今大会では村上選手がその大役を担った。

1回戦の中京大学は2対0、2回戦の関東学院大学は3対1で勝利。「でも、試合の内容は、調子が悪くて良いものでなかった」と村上選手。そこで、3回戦での強豪を前に、鍋山隆弘監督から激が飛び、村上選手は全員で円陣を組み、気合いを入れ直したと言う。前年度王者との対戦は、それまでにないプレッシャーだったに違いない。それでも気押されることなく、選手全員が全力で攻めた。だが、一筋縄ではいかない。両者一歩も譲らぬ拮抗した試合は大将戦まで続く。決着は、代表者戦で迎えることとなった。「副将までの6人が回してくれた勝負。絶対勝つと思って挑んだ」と、村上選手は当時の心境を話す。そして、相手が面に来たところを鮮やかに小手で返し、4回戦進出を決めた。

頂点を制す

早稲田大学撃破によって波に乗った本学選手たちの勢いは止まらない。4回戦は昨年2位の日本体育大学、5回戦は昨年3位の専修大学という強豪にも、大将戦までにきっちり勝利を収め、中央大学との決勝戦へ駒を進めた。優勝をかけた最後の勝負は、今大会2度目となる代表者戦までもつれ込んだ。早稲田大学に続いて村上選手が代表者戦に挑み、ここでも得意の小手を奪って今大会を制覇した。「ずっと結果を残せていなかったから、大学最後の大会で結果を出すことができてホッとした」と語る村上選手の表情は、達成感に溢れていた。



圧巻! 不敗の勝利

全日本女子大会も劇的な試合展開だった。全試合を通して、引き分けはあるものの、敗者数ゼロという驚異の結果を叩き出した。

全日本女子大会は、5人ずつの団体戦で4分間3本勝負。その他のルールは全日本大会と同じ。女子主将の三笘冴選手（体育4年）は大将を務めたが、「副将戦までに勝負は決まり続けていたので、決勝戦まで私の出番はなかった」と全員の活躍を笑顔で振り返る。

1回戦の同志社大学と2回戦の東海大学とは3対0で勝利。初戦から選手たちは適度な緊張感に包まれ、好調な出だしを見せていた。しかし、福岡教育大学との3回戦では最大の危機を迎える。相手のデータが乏しく、思うように一本が取れない。3人目の中堅まで全員が引き分けとなった中、副将の里井茜選手（体育3年）が流れを変えた。冷静な動きで返し胴を決め、昨年の苦い思い出の残る3回戦を突破した。里井選手は当時の状況を「良く覚えていないけど、からだが自然と動いていた。周りの期待に応えることができて良かった」と話す。三笘選手は「里井には本当に感謝している」と笑顔を浮かべていた。

続く4回戦の広島大学、5回戦の東京農業大学とも3対0で勝ち抜き、いよいよ東海大学との決勝戦へ。これまで活躍し続けていた里井選手は「これに勝てば優勝だと思ったら、急にからだが強張った。勝てないと思って、無理に攻めに行かず、勝負は三笘先輩に託した」と語った。実際、副将戦まで4人とも引き分け、勝負は大将戦で決することとなった。選手たちはじっと三笘選手を見つめた。三笘選手は「よし!」と気合いを入れ、笑顔で前へ進む。そして、上段から相手の小手を払い落し、すかさず面を決めた。

アベックV2目指して

男女ともに、今大会はここぞという場面で主将が決めてくれる、そんな印象を強く受けた。両主将とも、本学大学院へと進み、まだまだ剣道部で腕を磨く日々は続くそうだ。三笘選手の後を引き継ぎ、来季は里井選手が主将となる。今回、取材した3人がそろって「来季メンバーも強いので、今後も良い結果が出せると思う」と言い切った姿は頼もしい。アベック2連覇という偉業に一層の期待がかかる。

（萩尾奈緒香）

筑波スポーツ
平成23年11月22日(火)
第146号
題字:中山雅史氏
(コンサドーレ札幌・蹴球部OB)

全日本大会結果

1位 筑波大学
2位 中央大学
3位 専修大学
鹿屋体育大学

全日本女子大会結果

1位 筑波大学
2位 東海大学
3位 法政大学
東京農業大学

朗報続々 秋季リーグ特集

ラグビー部 33年ぶり 早稲田に快勝！

10月23日、ラグビー部は歴史的勝利に沸いた。地元茨城(ケーズデンキスタジアム水戸)で対抗戦3連覇を狙う強豪早稲田大学（以下、早大）と対戦し、筑波が21-7で勝利。1978年度以来33年ぶり、史上二回目の白星を挙げた。関東大学対抗戦で同シーズンに早大と慶応義塾大の両方に勝つのは今回が初めてである。

前半5分、SO松下彰吾選手(体育2年)のペナルティーゴールで先制(3-0)すると、そのすぐ後にはWTB彦坂選手(体育3年)が右隅にトライ。試合開始10分で8-0とリードした。前半30分には、危険なプレーによりFL水上彰太選手(体育1年)が10分間の退場になるが、不利な状況下でも筑波はペナルティーゴールをしっかりと決めて加点。11-0とする。さらに前半終了間際の39分には、注目の竹中祥選手(体育1年)が三戦連続となるトライを挙げ、18-0と早大を引き離して前半を終えた。

試合前半は筑波のペース。このまま後半もと期待したいが、そう簡単にはいかないのが強敵早稲田。昨シーズンの早大戦では、筑波が前半をリードして折り返しながらも、後半13点あった差を徐々に詰められ、最後に逆転されて負けるという苦い経験がある。昨年の悔しさがあるから、今度こそは勝ちたい。

後半2分、筑波はペナルティーゴールで21-0と点を加えるが、15分、今度は早大SHがゴール前のラックからで抜け出してトライ。コンバージョンゴールも決め、21-7とされる。ここから早大が勢いを増して反撃に出るかとも思われたが、筑波も負けず、相手陣で粘り強い戦いを見せる。試合終了間際には早大が必死の攻めを見せるもトライには至らず、そのまま試合終了となった。

ずっと待っていた瞬間だった。ノーサイドの笛とともに、選手たちは喜びを爆発させた。スタッフやスタンドの選手たちも歓喜に沸いていた。ゲームキャプテンである中川克信副主将(体育4年)は、「80分間筑波のラグビーを徹底してやりきれば勝てる自信はあった。全員が各自の役割を果たし続け、チーム一丸となって戦えた」と振り返る。また、歴史的勝利について、「勝った瞬間はあまり実感がなかった。歴史の壁を破れたという意味では筑波ラグビーにとってとても価値のある勝利。だが、目標は日本一。これを通過点としてまだまだ成長しなければ」と謙虚に語った。この日筑波は特に接点で強さを見せ、相手ボールを奪うターンオーバーも10度。早大を圧倒した。

村上大記主将（体育4年）は残るシーズンについて、「一戦必勝。一試合ごとに強くなって日本一を勝ち取る」と意気込みを語る。今年の筑波は1試合を残して現在対抗戦3位。最終戦の帝京大（昨年度大学選手権優勝）に対しどんな戦を見せるのか。そして日本一に向けた大学選手権での戦いにも、大いに期待したい。

（本間詩織）

早大戦の前後に行われた試合でも本学は奮闘した。

シーズン初戦の明治大学戦では、粘り強いディフェンスで明治の攻撃をしのぎ、3点のリードで前半を折り返す。しかし後半、明治が徐々に本学のスクラムを押し、最終的には17―23と、接戦を落とした。

この試合の2週間後に行われた慶応大戦では対慶応戦3年ぶりとなる勝利を収め、次節の早大戦に向けて弾みをつけた。そして、早大戦、続く成蹊大戦にも勝利し、前評判で「戦力充実」と評価されていた本学がここまで好調を維持している。

対抗戦初優勝を狙える位置につけ、対抗戦最終戦には強豪帝京大学との対決が控えている。シーズン終盤、そして大学選手権に向けてラグビー部から目の離せない冬になりそうだ。（大庭夏海）

試合結果

ラグビー関東大学対抗戦A

9/19	●筑波大	17 - 23	○明治大
10/ 2	○筑波大	27 - 15	●慶應義塾大学
10/17	○筑波大	21 - 7	●早稲田大学
10/24	○筑波大	54 - 3	●成蹊大学
11/12	○筑波大	42 - 3	●青山学院大
11/19	日本体育大学戦		
12/ 3	帝京大学戦		

女子バスケットボール部 3年ぶり16度目の 次はインカレ優勝へ 優勝!!

3年ぶり16度目の優勝へ

最終日前日、対早稲田大学に惜しくも敗れ、自力優勝への道が断たれたまま迎えた最終戦。秋の国立代々木第二体育館は熱気に包まれた。

迎えた最終日。筑波大が優勝するには、前日白星を飾った早稲田大に勝ち、同勝点で筑波大と並ぶ松陰大学が、拓殖大学との対戦で敗北することが条件であった。

序盤から両校とも一進一退の攻防が続き、華麗なプレーで観客を魅了する。中盤、筑波大は淀野潮里選手（体育3年)を投入。一気にゲームの流れが変わり、着実に得点を重ねる筑波大。一方、対する早稲田大はシュートが決まらず、苦しい立ち上がりのスタートとなった。

第2ピリオドでは、今年8月中国・深圳で行われたユニバーシアードの代表経験者である、天野佳代子選手（体育3年）、伊集南選手（体育4年）の活躍が光る。ここぞというところで速攻が決まり、早稲田大を大きく引き離す。17―8と余裕さを見せての第2ピリオド終了。試合は後半戦へと向かう。

後半戦。流れを変えたい早稲田大の、必死の反撃が始まる。しかし谷村咲姫選手（体育2年）の圧倒的なプレーを簡単に崩すことはできない。終盤、早稲田大選手による3Pシュートが決まり、同チームの士気を高めたのか、徐々に追い上げる早稲田大。しかし筑波大はリードを守り、最終ピリオドを迎える。

ここで手に汗握る展開が訪れる。なかなかシュートの決まらない筑波大。対する早稲田大は3Pシュートを次々と決め、一気に追いつく勢い。不穏な空気の中、残された時間はあと1分。この不穏な空気を打破したのは、伊集選手であった。終了間際、決定打となるリバウンドシュートを決めた。63―59で前日のリベンジを果たし、優勝への望みをつないだ。

筑波大対早稲田大のあと、同じく優勝候補の松蔭大と拓殖大の試合が行われた。拓殖大が勝ち、同勝点で並ぶ松陰大が負ければ、筑波大の優勝が決まる。試合を終えた本学選手らは固唾を呑んで両校の試合の行方を見守った。

両校とも一歩も譲らない、白熱したプレーが続き、会場内の興奮は最高潮を迎える。80―64でこの試合を制したのは拓殖大。この瞬間、筑波大の優勝が決まった。コートの裏では歓喜に沸く筑波大選手らの歓喜の声が響いた。

3年ぶり16度目の優勝。最優秀選手賞に天野選手、優秀選手賞に伊集選手が選ばれた。表彰式終了後、部員全員で大きな輪になり、会場内は桐の葉の歌で包まれた。

（上杉織美）

インカレにむけて 主将インタビュー

戦いはこれからだ。水谷佳代主将に話を伺った。

―最終日、早稲田戦に対する意気込みは―

『前日負けているので、最終日は絶対勝とうという心境で挑んだ』。

―トーナメント8位からのリーグ戦、どんな心境だったか―

『今までは優勝するという気持ちで迎えていたリーグ戦。今回は入れ替え戦だけは回避したいという危機感の中挑んだ。4年間で練習も精神的にも一番きつかった』。

―優勝が決まった瞬間―

『安心した』。

―インカレにむけて―

『優勝したい。みんなで歌った桐の葉をインカレでも歌いたい』。

最優秀選手賞コメント 天野 佳代子選手(体育4年)

『チーム一丸となって戦った結果が優勝につながってとても嬉しいです!インカレがすぐあるので気を引き締め、更にパワーアップして日本一を目指して頑張りたいと思います!』

優秀選手賞コメント 伊集 南選手(体育3年)

『このリーグ戦は優勝出来て嬉しかったのですが、それと同時に課題がたくさん残りました。インカレでは目標である日本一をチーム一丸となって成し遂げたいと思います。応援よろしくお願いします。』

硬式野球部

地元で勝点得るもリーグ5位

10月8日、土浦市営球場では硬式野球部の秋季リーグ戦が行われた。この日の相手は武蔵大学。ここまでのリーグ戦で3校を相手に勝点1の筑波は、この節こそ勝点をもぎ取りたいところ。先発は久保貴大投手(体育4年)。秋晴れの日差しが降り注ぐ午後、試合が始まった。

久保投手は1回を三者凡退に抑えると、続く2・3回も二つの併殺打を取って、三回までで打者9人に抑える好投。4回には相手先頭打者に死球、その後安打などで二死一・三塁の状況になるが、後続の打者を犠飛に打ち取りピンチを切り抜ける。

その裏の筑波の攻撃では、先頭の大島建選手(体育4年)が死球で出塁すると、相手バッテリーのミスの隙に盗塁し、無死二塁に。次打者の四番松浦昌平選手(体育2年)はこの好機に中前安打を放ち、二塁走者の大島選手が本塁へ走る。待望の先制点かと思いきや、ここで武蔵大中堅手の好返球により刺され、この回は無得点に終わってしまう。

その後もなんとか一点を取ろうと戦いが続くが、スコアボードには「0」が並ぶ投手戦。試合は延長戦へ突入した。

10回表、武蔵大の攻撃。ここまで好投を続けてきた久保投手がつかまり、3本の安打を浴びてついに武蔵大に先制点を献上。その裏、筑波は二死から出塁するも、後が続かず試合終了となった。悔しい負けにも、「明日は必ず勝ちます」と、選手が力強い言葉をくれた。

そしてその言葉通り、翌日9日は序盤から四番松浦選手のソロ本塁打を含む3点を取り、相手を0点に抑えて勝利。勝点がかかる10日も筑波が先制。6回に一度追いつかれるも、その裏ですぐ取り返し、更に7回にも1点加えて3・1。地元で待望の勝点を手にした。

その後最終節では2敗し、最終結果は5位。悔しい結果に、「負けが続いても応援し続けてくれた人達に、もっと勝ちを見せたかった」と語る鈴木喜敬主将(体育4年)。

この一年、「やることはやってきた。厳しい練習も重ねてきたが結果に繋がらず、勝つ難しさを感じ続けた。後輩には仲間を大切にしながらも、やはり結果にこだわってやってほしい」。悔しい思いを共にした後輩たちが、きっと来年以降、彼らの思いを強さに変えて戦ってくれるだろう。

(本間詩織)

アメフト部

好調↑2部昇格へ!!

『2年で一部昇格』。史上初めて三部リーグで戦うことになった、筑波大学アメリカンフットボール部の今シーズンの目標である。そしてその目標通りに、格の違いを見せつけた戦いを続けている。

リーグ初戦となった9月24日の杏林大学との試合では開始直後から相手を圧倒。シーズン最初の得点もすぐに生まれた。RB佐々岡慧選手(体育3年)のランでゲインすると最後はQB上田清史選手(体育4年)からWR松尾博一選手(体育4年)への30ydのロングパスが決まりTouch Down(以下、TD)。これがシーズン最初のTDとなる。その後もRB佐々岡選手の58ydTDランなどで得点を重ねていく。守備でもDL松木庸選手(体育2年)の活躍もあり相手を無失点に抑える。その後も筑波大が終始圧倒。1年生を出場させる余裕も見せ、65-0と大差での勝利を収めた。

初戦で勢いに乗った本学は続く2戦目の東京国際大学戦を77-0、3戦目の高千穂大学戦を91-0と大差で勝利する。

そして11月6日に行われた4戦目の相手はOB亀山監督率いる流通経済大学である。本学の戦い方を熟知しているだけに、「この試合だけは何が起こるか分からない」と選手たちは感じていた。そして、試合が始まるとその予感は的中。ここまで3試合とも1Qから二桁得点していたチームが1Qを無得点に抑えられてしまう。それでもすぐに立て直せるのが今の筑波大である。2Q開始早々QB上田選手からWR松尾選手にパスが通るとこの試合初めてのTD。その後相手のミスなどもあり前半を24-0で折り返す。後半に入り流経大も反撃を始め、あと1ydでTDというところまで攻め込まれるが、筑波大のディフェンスが勝り、この攻撃も防ぎきる。この守備から勢いに乗った筑波大は次々と得点を重ね、終わってみれば4試合連続無失点となる59-0で勝利した。

ここまで、全試合大差で勝利を収めている本学だが、11月19日の横浜市立大学との試合はこれまでの試合のようにはいかないだろう。横市大も本学と同様4連勝中で、流経大には59-0で勝利。実力は拮抗している。しかし、二部昇格に向けて負けられない試合である。

主将の島田知倫選手(体育4年)も「今は結果だけ見れば完勝しているが、自分たちの目指すプレーを追求して残りの全試合に勝利したい」と抱負を語ってくれた。リーグ戦が終わると12月10日に2部チームとの入替戦が待っている。『2年で一部昇格』のためにも負けられない戦いは続く。

(田村俊和)

バド部

奥井・住田ペア インカレ女子複3位

第62回全日本学生バドミントン選手権大会(以下、インカレ)が10月15~20日にかけて行われた。筑波大学では団体戦(女子)でベスト8、女子ダブルスで奥井智菜美・住田有希恵(共に体育4年)ペアが3位に入賞した。

ダブルスをメインにやってきた2人。2・3年次もインカレのベスト8に入っている。今年は抜きんでたペアがなく実力が拮抗しており、どこが勝ってもおかしくなかった。それだけに優勝への思いは強かったという。

2回戦からとなった初戦はその思いがやや空回りした。団体戦、シングルスの試合はすでに終わってしまっており、負けたらもう後がない。焦りもあり、2ゲーム目を取られてしまう。しかしそこから立て直し、2-1でこの試合に勝利した。

3回戦は1つの山場となった。浦谷・篠田ペア(専修大学)には勝ったことがない。しかし相手は1年生ペア。4年生の意地を見せた奥井・住田ペアの気持ちが勝り、硬くなった相手を1ゲーム目22-20で制すと、そのまま2-0でこの試合にも勝利した。

続く4回戦・5回戦もストレートで制し、迎えた準決勝。相手の宮内・鈴木ペア(日本体育大学)は昨年別の選手と組んで優勝、準優勝という実績を持つ。そのため、この試合はそれまでにない厳しい戦いとなった。

1ゲーム目は相手から離されることなく、点の取り合いとなるも、17-21でおとしてしまう。2ゲーム目は奥井・住田ペアが終始リードし、最後は追い上げられるも逃げきって21-19で3ゲーム目へ。ファイナルゲームはまたも点の取り合いとなる。9-11と2点ビハインドでチェンジエンド後、一度は逆転。点差を広げたが、最後は宮内・鈴木ペアに一気に流れを持って行かれ、15-21。1-2で惜しくも敗退となった。

「悔しい」。と口をそろえた奥井・住田ペア。12月5日から行われる全日本総合選手権大会が2人で組む最後の試合となる。「ベストを尽くします。目標はベスト4」。

次こそは、と意気込む2人の試合は必見だ。

(矢畑 冴佳)

男子バスケ部 in カピオ

観戦記

10月1日・2日はつくばカピオホールで、関東大学バスケットボールリーグ戦が計10試合行われた。筑波は1日が明治大学(以下、明治大)、2日が東海大学(以下、東海大)との対戦。

1日、明治大戦。試合開始早々、明治大はリバウンドから得点し先制すると、その後3Pシュートを続け、一挙9点を得る。しかし筑波も負けず、星野拓海選手(体育3年)の3Pシュートを皮切りに、田渡修人選手(体育4年)、そしてまた星野選手が次々と3Pシュートを決めて追い上げる。筑波は第1ピリオドの終盤にも3Pシュートを決めて逆転に成功、16-15で終えた。

第2ピリオド序盤、今度は点の取り合いになるが、加納誠也選手(体育4年)や田渡選手の3Pシュートなどで明治大を引き離し始める。その後も田渡選手が速攻を決めるなど試合のスピード感もアップし、39-26と明治大を大きくリードして前半終了。

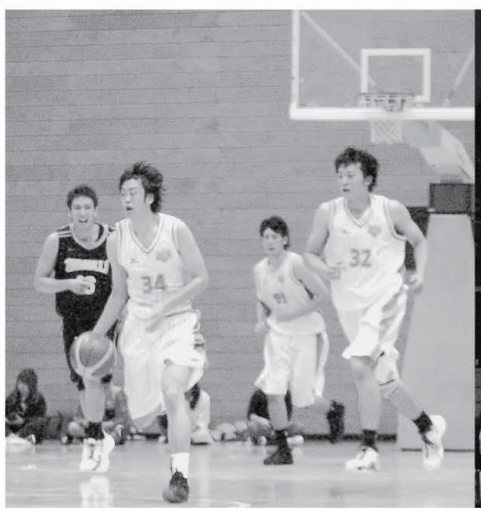
第3ピリオドでも筑波はスピードとテンポの良い攻撃を続け、中盤では20点差をつける。しかしその後明治大も意地を見せ、59-48と11点差まで詰めて最終ピリオドへ。

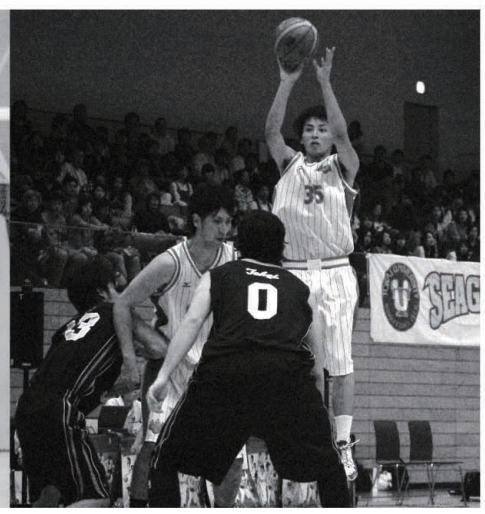
第4ピリオド、再び点を取り合う両校。しかし終盤、筑波は田渡選手の連続得点、そして加納選手や富岡翔選手(体育4年)らの得点により明治大を突き放し、最終スコア75-56で快勝した。この日、3Pシュートを次々に決める筑波のプレーに、観客は盛り上がった。

2日の東海大戦では、試合開始すぐに東海大が大きなリードを奪い、筑波が必死に追い上げて点差を詰めるが、再び引き離される。その後も追い上げては突き放されるという展開が続く。最終ピリオド残り5分、86-60という大きな点差を前に、筑波は坂東拓選手(体育1年)の3本を含む7本の3Pシュートで粘りを見せるも及ばず、98-83で試合終了となった。

男子バスケットボール部は10月末にリーグ戦を終え、結果は5位。しかし11月末にはインカレが控えている。リーグの悔しさをバネに、インカレでの活躍を期待したい。

(本間詩織)





編集部員募集!!
毎週(水)19:00~
@体育系サークル館2F
連絡先:lcen.0rx.v.3-tan@docomo.ne.jp
(担当:上杉)

男子バレーボール部 無念の5位

9月に開幕した、11年度秋季関東大学バレーボールリーグ戦(以下秋季リーグ)1部の結果が、10月16日の最終日をもって決定した。筑波大学男子バレーボール部は、惜しくも5位という結果に終わった。

序盤の試合は好調であったが、後半の試合ではミスが目立ち、なかなか勝利をあげることができなかった。「今大会は、自分たちが納得する結果ではなかった」。主将の木原忠相選手(体育4年)は、そう言って悔しそうな表情を浮かべた。

チームの課題が浮き彫りになったのは大会8日目、中央大学との一戦だった。1セット目は取られたものの、2セット目を取り返すことができた。互いに譲らぬ試合展開となり、勝負は最終セットまでもつれこんだ。本学も粘りのプレーをみせたものの、惜しくも敗れてしまった。「5セット目に入り、ミスを連発してしまった。自分たちは精神的に苦しい場面で弱い」と木原選手は振り返った。

12月には全日本バレーボール大学男子選手権大会(以下全日本インカレ)が開幕する。もちろん狙うは優勝だ。そのために、今後の練習にどう励んでいくかを聞いてみた。「今、個人やチームの力が足りない。精神的にもっと強くなる必要がある。上級生が中心となって時には厳しく練習していきたい」と、頼もしい言葉が返ってきた。

6月に行われた東日本バレーボール大学選手権大会、7月に行われた全日本大学男子バレーボール東西選抜優勝大会で優勝した男子バレーボール部だ。実力は十分にある。秋季リーグこそ振るわなかったが、この悔しさをバネに、全日本インカレでは優勝を期待したい。(三浦加奈絵)

女子バレーボール部 一歩及ばず3位

写真提供:岩下志保さん

11年度秋季関東大学女子バレーボールリーグ戦(以下秋季リーグ)1部が、10月16日で最終日を迎えた。筑波大学女子バレーボール部は見事第3位に入賞した。

勝敗数で、上位3校は10勝1敗で並んでいる。そのため、セット率、得点率により順位が決定した。その結果、1位東海大学、2位嘉悦大学、そして本学は3位となった。決して悪い結果ではないが、「狙っていたのはもちろん優勝。満足はしていない」と、主将の高橋那依選手(体育4年)は、今回の結果に甘んじていないようだ。

前半から上位3校は好調で、負けなしの試合が続いていた。本学も次々と勝利をあげ、順調な勝ちあがりかと思われたが、苦しい試合展開も多かったという。優勝は手を伸ばせば届く距離にあった。「自分たちの力はまだ足りない。プレーに波がある」と、3位に落ち着いてしまった理由をこのように分析している。しかし、「春や夏より、選手1人1人が着実に成長している」と、次に期待できる言葉も語ってくれた。

今回の秋季リーグを終えて、高橋選手自身の課題も見つかったようだ。「苦しい時や、得点がほしい時に、もっとブロックやスパイクを決めたい。上級生がプレーで、チームをもっと引っ張っていかなければ」と、選手として自分に妥協せず、主将としてチーム全体を鼓舞しよう、という強い気持ちが伝わってきた。

今年の女子バレーボール部のチームスローガンは「誠意」だ。このスローガンは毎年4年生が中心に決めており、バレーボールだけでなく、様々な面でも成長していきたいという意味が込められている。試合を重ねるごとに、成長し続ける女子バレーボール部。どこまで躍進できるか、注目だ。

12月からは、一年間の締めくくりでもある、全日本バレーボール大学女子選手権大会(以下全日本インカレ)が開幕する。高橋選手に意気込みを聞いてみると、「全員で優勝狙います!」と力強く答えてくれた。今後は、秋季リーグの反省を活かして日々の練習に励むそうだ。

4年生にとっては、全日本インカレは最後の集大成となる。チームスローガンである「誠意」を胸に、有終の美を飾ってほしい。女子バレーボール部の活躍から目が離せない。(三浦加奈絵)

惜敗!リーグ3位 女子ハンドボール部

関東学生ハンドボール連盟秋季リーグ戦において、筑波大学女子ハンドボール部は1部3位という成績を残した。1、2位の日本体育大学、東京女子体育大学(以下、日体、東女体)に1点という僅差で敗れ、惜しくも優勝を逃した。

強豪校として名高い筑波大にとって、春季リーグの6位は信じがたい結果だった。そこで、夏は合宿期間を中心に課題の克服に燃えた。

「チーム力が上がった、という実感がありました。でも、やることはやりきったという吹っ切れた気持ちと同時にこれで勝てなかったらどうしよう、という不安もありました」と話してくれたのは主将の中西朋代選手(体育4年)。

結果は3位。日体戦、東女体戦ともに、終始競る展開となった。1、2点差をキープし続けたがイージーミスが出た分、筑波大が及ばなかった。

「悔しい、としか言いようがない。勝てた試合でした。だから試合後はみんな落ち込んでいました」。

最終的に日体大とは得失点差で並んでおり、この試合を引き分けても優勝が見えていた。自滅したような結果となった分、悔しさは大きかったようだ。しかし今は全日本学生選手権(以下、インカレ)前に灰汁が出た、と切り替え、練習に励んでいるという。

「今の状況が、例年だったら春にできていたはずなんです。でも、秋になってやっとスタートラインに立てた。順位が上がった喜びに浸るのではなく、ここがスタートラインなんです」。

地震の影響もあり伸び悩んだ春と比べて、ディフェンス力が上がり、スタートメンバー7人以外の選手のレベルも上がって層が厚くなった。春は怪我をしていたエースの川俣ゆかり選手(体育3年)の復帰により、攻撃の展開に幅や深みが増した。成長した筑波大の力をインカレの舞台では存分に発揮してほしい。(矢畑冴佳)

男子ハンドボール部 秋季リーグ&インカレ 「気持ちで負けた…」

果敢にゴールを狙う主将井上元輝選手

8月27日から開幕した関東学生男子ハンドボール連盟秋季リーグ序盤、春季リーグで敗戦した日本大学、引き分けた国士舘大学にそれぞれ勝ち、今季リーグ優勝の日本体育大学に2点差まで詰めるなど、調子が良かった。しかし、9月19日の対立教戦で、エース八巻雄一選手(体育2年)が怪我をすると、得意としていたセットオフェンスが機能せず、春季に続き4勝4敗1分で6位という結果に終わった。だが、戦い方を春季ではWポストであったものを、今季はしっかり守って速攻で点を取るという作戦に切り替えたことで、競った試合も多く、これからの伸びが楽しみな面も見られた。

その後、11月2日から岩手県花巻市で行われたインカレに出場するも、去年も1回戦で当たっている中部大学に2点差で惜しくも負け、今年の正式戦を全て終えた。主将井上元輝選手(体育4年)は全体を振り返り「これまでにあまりやって来なかった走り込み、練習試合を多く行ったものの、試合で普段の力を出すことができなかった」と悔やみ、「気持ちで負けた」と話す。来年度からはコーチが抜けることから、選手たち自身で練習メニューなどを考えなければならないそうだ。

最後に、井上選手は「チームの気持ちの高め方や雰囲気作りを課題に、主体性を持ってチーム一丸となり頑張ってください」と後輩にエールを送った。(明本彩美)

結果一覧

【体操競技部】
第65回全日本体操競技団体・種目別選手権大会
男子団体　12位
小田勝朗、遠藤正鉱、鬼塚翔太、安達修平、寺田航太、森井亮和
女子団体　7位
小山　愛、鈴木杏奈、田副葉月、江嶋とも実、杉浦佳奈、菅野　恵

【弓道部】
関東学生弓道選手権大会　決勝大会
先攻　大東大　60射36中
中攻　都留文大　60射34中
後攻　筑波大　60射45中
総合結果　優勝（女子王座決定戦出場決定）
女子個人
谷口志緒里（体育2年）51中／60射　優勝（女子東西対抗戦出場決定）
伊藤杏奈（体育2年）45中／60射6位
総合結果
男子個人
神野　晧平（応用理工3年）70中／80射　第4位（順位決定同中競射）

【オリエンテーリング愛好会】
2011年度日本学生オリエンテーリング選手権大会ロングディスタンス競技
男子選手権クラス
野本圭介(社工1年)
1．38．03　第4位

【陸上競技部】
2011日本ジュニア・ユース陸上競技選手権
男子
110mh
齋藤陽平（体育1年）
14．19 第4位
三段跳
米澤宏明（体育1年）
14m97 第6位
女子
800m
谷本有紀菜（体育1年）
2．09．41 第5位
三段跳
黒岩由樹（体育1年）
11m69　第4位
円盤投
河合郁実（体育1年）
45m69　第2位
ハンマー投
大崎かな（体育1年）
55m30　第1位　大会新記録

【軟式庭球部】
2011関東学生ソフトテニス秋季リーグ戦
男子4部
○筑波大4・1●群馬大
○筑波大3・2●神奈川大
○筑波大3・2●青山学院大
●筑波大2・3○千葉商科大
●筑波大0・5○国士舘大
総合結果　3勝2敗、第2位
女子3部
●筑波大0・3○城西大
○筑波大2・1●東京学芸大
●筑波大1・2○東海大
○筑波大2・1●法政大
●筑波大0・3○明治大
総合結果　2勝3敗、第4位

【男子ラクロス部】
第24回関東学生ラクロスリーグ戦（3部Dブロック）
○筑波大11・4●玉川大
2部3部入れ替え戦進出決定

【ライフセービング部】
第37回全日本ライフセービング選手権大会
2kmビーチラン
浅岡紘季（資源2年）
第5位

【女子ソフトボール部】
2011年度関東学生女子ソフトボール秋季リーグ戦
○筑波大18・0●日本大
○筑波大15・1●埼玉大
○筑波大14・2●千葉大
○筑波大7・6●茨城大
総合結果　3部優勝

【男子ソフトボール部】
2011年度関東学生男子ソフトボール秋季リーグ戦
○筑波大15・6●日大生産工学
●筑波大3・5○茨城大
△筑波大3・3△芝浦工業大
●筑波大3・13○東京国際大
総合結果　3部準優勝

（11月11日現在）

35th 秋季スポーツ・デー Sports Day

去る10月22・23日に第35回秋季スポーツ・デー（以下スポデー）が開催された。22日は降雨によって残念ながら屋外の正式種目は順延となったものの、学生委員会の尽力によって、予定されていたプログラムを二日目に消化しきることができた。

今回開催された正式種目は6種目。屋外ではサッカー、ソフトテニス、キックベース、駅伝が、屋内ではバレーボールとバドミントンが催された。恒例となった学生委員会企画や体育会系サークルによる企画も行われ、延べ三五〇〇人もの参加者が集い、汗を流した。

今回、スポデー学生委員会の木暮聖太委員長（物理三年）にお話を伺った。まず初開催となった、委員会企画の缶蹴り開催までの経緯について聞いてみた。

「今回は駅伝の開催によって二日目に陸上競技場が使えなくなった。そこで、新たな企画を立てることになったので新企画として缶蹴りの開催に至った。」

新たな試みとなったこの企画は参加者から好評であったため、来年以降もできれば続けていきたいとのこと。

次に春季スポデーの反省から、秋季スポデーを開催するうえで考慮したことについて伺った。春季では開催当日に向けてのシミュレーション不足を痛感したという。そこで、「春季の反省を受けて、あらゆる事態に柔軟に対応できるように当日を想定したシミュレーションを徹底的に行った」と、準備の成果を大いに実感している表情を見せてくれた。

秋季スポデーが終わると学生委員会は新体制が発足し、現三年生は引退となる。つまり木暮委員長も今回の秋季スポデーをもって一線を引くことになる。新体制が発足した学生委員会について、それから来年以降のスポデーについて、どのようなものになってほしいか、最後に木暮委員長に伺った。

「私たち三年生はこれで引退し、後輩たちへの引継ぎもすでに行われた。企画する学生委員会も、それからスポデーに参加してくださる学校関係者の皆さんも、ともに携わって楽しいと思えるような、そんなスポデーを彼らには創ってほしいですね。」

（湯地遼）

筑波レガッタ 体験記

絶好の行楽日和となった11月3日。本学漕艇部主催の筑波レガッタが霞ヶ浦で開催されました。今年で37回を数えるこの大会、筑波スポーツ編集部も参加しました。

気合十分で会場に乗り込んだ私たちは、3つある部門の中で最多参加者数の混合の部に出場しました。編集部からは2チームがエントリー、私が参加したチーム、「ハッピーKAZU君」は準々決勝に進出しました。

実は私、編集部の参加者の中で唯一、一昨年も参加した経験者。当時の記事を見直すと、混合の部で下から3番目のタイムと散々な結果だったようです。予選突破し、前回の雪辱を果たした、かのように思えましたが、今回目指すは決勝進出。なぜなら前回の文化系チームと違い、今回は体育専門学群生を擁するなど、期待できる体育会系チームなのです！

準々決勝は、混合の部2連覇中のチームと編集部の別チームを予選で破ったチームという強豪揃いの組となりました。予選突破で大きな自信をつけた私たちは、緊張感の中いざレースへ。しかしスタート直後、隣のボートと衝突するという予期せぬアクシデントに見舞われてしまいました。その間に連覇中のチームからは離されてしまったものの、すぐに立て直し、2位に向けて壮絶なデットヒートを繰り広げました。最後はコックス（掛け声でまとめる役）を担当した私の無茶苦茶な掛け声に、漕手の4人がぴったりと合わせ、見事2位を確保！アクシデントがなかったら…と悔しい思いもありましたが、予選より20秒もタイムを縮められたので、満足のいく結果でした。レース後にボートの上で見た夕日は格別！

今大会の賞品は「筑波・土浦の名産品」がテーマとなっていました。参加賞にはれんこんサブレが配られ、上位入賞者には地酒や地元のスイーツが贈呈されました。お昼には編集部員待望の炊き出しが行われ、れんこんカレーが振る舞われました。このカレー、とても美味！大好評でした。

また、斬桐舞による演舞も会場を盛り上げました。特に私たちは一緒に踊りに参加し、記念撮影までしてもらいました。

こうして私たちはレースだけではなく筑波レガッタの隅から隅まで満喫することが出来ました。その他にもバーベキューが出来る等、それぞれの楽しみ方がある筑波レガッタ。来年は是非参加者となってみませんか？

（斉藤千絵）

実行委員長 金子 英樹さん（応理3年）

「地域貢献を目的とした筑波レガッタは今年で第37回を迎え、約160名の方にご参加いただきました。より多くの方にボートを楽しんでいただけるようさらに努力して参りますのでこれからも漕艇部をよろしくお願いします。」

トレーナーサークルGattsu 受講生のモノ申す！ Vol.2

今回の担当者 硬式野球部所属 斉藤慎太郎（体育専門学群3年）

体育専門学群3年斎藤慎太郎です。現在、硬式野球部でトレーナーとして活動しています。2年生の秋に野球部のトレーナーになると同時に、このGattsuというサークルに参加させていただくようになりました。いわゆる「勉強会」と聞いていたので初めての参加ではかなり身構えていたのを覚えています。

Gattsuの最大の特徴であり、長所というものは、その雰囲気だと思います。僕のような学生トレーナーだけでなく、実際に現場でトレーナーとして活動されている方もいるため、知識や経験には大きな差があります。そのような人たちから単に知識や技術を教わるのではなく、学生の視点をうまく混ぜ合わせながら、どうやってチームの中で活かせるかを全体で考えていこうという雰囲気は、このサークルでしか作れないのではないでしょうか。このような話し合いが、部の中でかなり役立ったのを覚えています。

今後は、トレーナーだけでなく、他のスタッフやコーチ、さらには選手にも参加してもらい、よりよい時間になればと思います。

（寄稿・斎藤慎太郎）

Pick up Player! 注目の選手

©Satoshi TAKASAKI/JTU

椿 浩平選手（体育2年）

今回注目した選手は、去る9月23日に台湾で行われたアジアU23トライアスロン選手権で見事優勝を果たした椿浩平選手（体育2年）である。

椿選手がトライアスロンに出会ったのは中学生の頃。陸上部に所属していた憧れの先輩がトライアスロンをしていたことがきっかけで、椿選手もトライアスロンを始めたという。それから椿選手は宇都宮村上塾の村上監督の指導の下、コツコツと練習をこなしていき、世界でも通用するトライアスロン選手に成長していった。

「プロを目指すためには、何事も自分でやらなければいけない。自分を試すつもりで本学に入学した」と話す椿選手は普段の練習も「人で行っている。コーチとメニューの内容や意味について話し、そのメニューを自分でこなしている。スイムは水泳部と一緒に練習を行っており、週末は宇都宮村上塾の練習に参加しているそうだ。

そんな椿選手のこれからの目標は「選手として、欧州のトップアスリートと情報交換をするために、英語力をつけること」だという。英語を話せるようになることで、海外の選手に情報収集力で劣ることはなくなる。また、「世界の頂点であるオリンピックでメダルを獲りたい。選手は結果で恩返しするしかない」と力強く話してくれた。

最後に椿選手にトライアスロンの魅力について聞いてみた。「トライアスロンは才能ではなく、自分と向き合って、どれだけ練習をコツコツとやっていけるか、ということが重要なスポーツ。やるだけなら誰でも出来るから、どんな年代の人も挑戦することが出来る」

老若男女問わず挑戦できるトライアスロンで日々自分と向き合い、努力を続ける椿選手の世界での活躍が楽しみである。

（小峰朱理菜）

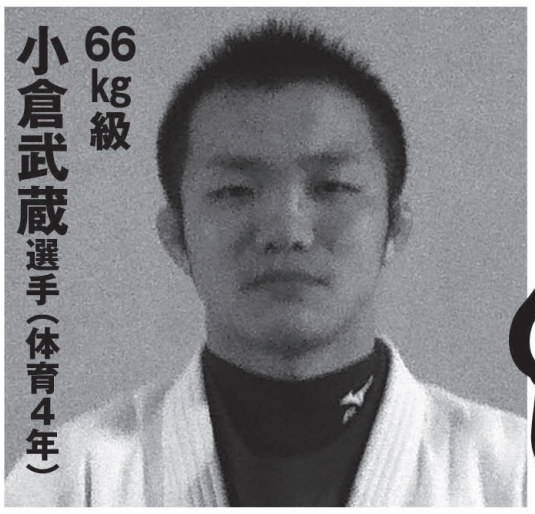
主な成績
- 2011アジアU23トライアスロン選手権　第1位
- 2011世界U23トライアスロン選手権　第21位

次号予告

平成23年度 今年の“顔”勢揃い!!

2月中旬発行予定!

体育会賞受賞者一覧・卒業生特集…e.t.c



66kg級 小倉武蔵選手（体育4年）

全日本学生柔道 優勝

小倉武蔵選手 66kg級
遠藤宏美選手 48kg級

10月8、9日に日本武道館で、学生個人日本一を決める全日本学生柔道体重選手別大会が行われた。本学柔道部からは、小倉武蔵選手（体育4年）と遠藤宏美選手（体育1年）が見事優勝を果たした。二人の選手以外にも、男子では金子亮平選手（体育3年）女子では武井嘉恵選手（体育3年）菅原歩巴選手（体育2年）が3位入賞するなど多くの選手が活躍をした。

10月29、30日に行われた、全日本学生柔道体重別団体優勝大会では男子は準決勝で日本体育大学に敗れ、惜しくも昨年からの連続優勝は逃してしまった。また、女子は2回戦で環太平洋大学に敗れるという結果だった。

今回は、66キログラム級で今大会1年ぶり3度目の優勝を果たした小倉選手に話を伺った。小倉選手は柔道部の男子主将も務めている。

個人戦を振り返って、4年間の全日本学生柔道体重選手別大会で一番良い内容だったという。連続優勝を果たした1、2年生時は、ただがむしゃらにやっていたが、優勝を逃し負けてしまった昨年からは考えながら柔道に取り組んだそうだ。そのことで自分自身のステップアップにつながりよい試合ができたのではと語った。また、学生最後の年ということで集大成を見せるという意味でも、主将として後輩たちに目に見える結果を残すという意味でも今大会は、落としてはいけないタイトルであったそうだ。

準決勝で負けてしまった団体は、強い選手に頼ってしまう他力本願なところがどこかにあったことが敗因の一つではと振り返った。そのような気持ちがあったから、競った試合で勝ちきれなかったと悔しそうに語った。

また、小倉選手自身今年から主将になったことで変わったことがあるという。それは、下の代に見られているという練習への取り組みを自分からそうだ。また、主将や団体戦でのメンバーに選んでくれた先生や、部員たち、応援してくれている同級生などさまざまな人との関係の大切さに気付いたことも大きな変化だそうだ。そのように周りとの関係を大切にすることで、試合でも良い結果を残すことにつながった気がするという。主将として、大変なことを伺うとやはり世界レベルで活躍する選手からインカレでの活躍をする選手など様々な個性派ぞろいの部員たちをまとめることだという。それぞれが自分の目標を設定し、そのなかでどれだけ頑張れるかが重要であるという。

全日本学生柔道体重選手別大会3回の優勝をはじめさまざまな大会で活躍をしてきた小倉選手。この4年間はとても充実していて今後の糧になる学生生活であったが、ただ自分たちの代で団体のタイトルを取れなかったことが心残りだと語った。

取材日の週末は、体重別の個人日本一を決める講道館杯全日本柔道体重別選手権大会が控えていた。講道館杯への意気込みを聞くと「優勝しかない」との力強い答えだった。世界レベルでも多くの選手が活躍する柔道部。今後のさらなる活躍が楽しみだ。

（小島菜奈美）

試合結果

全日本学生柔道体重別選手権大会
10月8日、9日
日本武道館

男子
- 66kg級 優勝 小倉武蔵選手
- 100kg級 第3位 金子亮平選手

女子
- 48kg級 優勝 遠藤宏美選手
- 57kg級 第3位 武井嘉恵選手
- 78kg級 第3位 菅原歩巴選手

全日本学生柔道体重別団体優勝大会
10月29日、30日
尼崎市記念公園総合体育館

男子
- 優勝：東海大学(東京)
- 準優勝：日本大学(東京)
- 第3位：明治大学(東京)、國學院大学(東京)
- 第5位：山梨学院大学(関東)、筑波大学(関東)、日本体育大学(東京)、桐蔭横浜大学(関東)

女子
- 優勝：環太平洋大学(中四国)
- 準優勝：立命館大学(関西)
- 第3位：東海大学(東京)、帝京大学(東京)

蹴球部 天皇杯出場

J1鹿島と善戦も…

天皇杯　王者鹿島と同県対決

天皇杯全日本サッカー選手権大会。通称、天皇杯と呼ばれるこの大会は、サッカー界においてアマチュアチームがプロチームと公式戦の舞台で戦える唯一の機会となっている。そして今年、本学蹴球部が4年ぶりにその挑戦権を手にし、堂々たる戦いを繰り広げた。

天皇杯出場への切符を手に入れるためには、茨城県サッカー選手権大会を制し、茨城県代表にならなくてはならない。代表の座は、2000年より長きに渡り流通経済大学と優勝を分け合っており、今年の決勝戦も流経大との対戦となった。延長までもつれ込んだ死闘の末、1対0でライバルを振り切り、優勝を決めた。

本戦1回戦の平成国際大学（埼玉県代表）戦では、2対1の接戦で制した本学蹴球部。Jリーグチームとの対戦となる2回戦に駒を進めた。

2回戦は10月12日、相手は「同県対決」となる鹿島アントラーズ。天皇杯連覇を狙う名門中の名門である。筑波が大物食いを達成する瞬間を目撃するため、平日ナイトゲームにも関わらず集まった応援団のバス8台を引き連れて、鹿島の本拠地・カシマサッカースタジアムに乗り込んだ。

試合は序盤から好勝負を予感させる立ち上がり。今年で就任4年目となる風間八宏監督が掲げるパスサッカーを、選手たちはプロ相手に堂々と披露。MF八反田康平選手（体育4年）を中心に攻撃を組み立て、FW赤崎秀平選手（体育2年）は再三に渡り鹿島DFラインの裏を突いてチャンスを演出。前半22分にはMF玉城峻吾選手（体育2年）が放ったミドルシュートがバーを直撃するなど鹿島ゴールを脅かし、青に染まったアウェイ側スタンドを沸かした。

しかし前半33分、先制点を挙げたのは鹿島。守備陣が高さで苦戦していた相手FW田代有三選手に、セットプレーから頭で合わせられ、先制を許す。さらに5分後の38分、一瞬の隙を突かれて相手FW大迫勇也選手に抜け出されると、右足で冷静に流し込まれて0対2。リードを広げられて前半を折り返す。

2点を追いかける後半、FW瀬沼優司選手（体育3年）を投入した筑波は、なんとか1点を返そうと再び攻勢を強めようとするものの、最後まで鹿島守備陣の牙城を崩すことができず試合終了。0対2。王者相手に惜しくも金星を挙げることができなかった。

最後は王者鹿島のしたたかさに屈した形となった本学蹴球部だったが、自分たちのサッカーを貫けたことは今後に繋がるだろう。この悔しさはぜひリーグ戦優勝という形で晴らしてほしい。

リーグ戦

2004年以来の優勝へ

天皇杯は敗れたものの、リーグ戦では第18節終了時点で2位につけている。ここ3試合勝利から遠ざかっているのは気がかりだが、まだ首位・専修大学との一戦も残っている。本学蹴球部がリーグ戦を最後に制したのは2004年。実に7年ぶりの優勝へ残るは4戦。歓喜の瞬間が待たれる。

（有田和晃）

筑波大学 応援部WINS

単独公演決定!!

12月22日（木）@つくばカピオ
開場/18:30　開演/19:00

こんにちは!筑波大学応援部WINSです。我々WINSは『応援活動を通じて筑波大学を元気にする』ことを目標として日々活動しております。

前身である『筑波大学応援団桐葉』から2007年春に『筑波大学応援部WINS』として改称・結成され早5年、年々活動の幅を広げ、そして今回遂に初の単独公演"桐華祭"を行うこととなりました。

12月22日、つくばカピオにて18:30より開場、19:00より開演致します。学ラン姿で全体を指揮していくリーダー部、応援の花形チアリーディング部、応援の音楽を奏でるアンサンブルバンド部、各部が共同して創り上げる大迫力のコラボレーションステージ。これぞ応援部!実際の応援で使われるハーフタイムショーや応援メドレー。その他伝統の応援歌「筑波大学応援歌」「霊峰仰ぐ」など数多くのプログラムをご用意しました。桐華祭ならではの演出で、普段の応援や学内でのステージよりも更に力強く、そして華やかなステージをお届け致します。

リーダーの迫力、チアリーディングの魅力、アンサンブルバンドの活力を間近で、目だけでなく耳や肌でも感じてみて下さい。この1年間で培った応援部としての成果を披露致します。

ご来場下さった方一人一人に笑顔になって頂けるよう、部員一同全力で応援致しますので、是非とも足をお運び下さい。

（寄稿・土田大幸（広報補佐））

編集後記

お鍋がおいしい季節になりました。気温がぐっと低くなり朝晩冷える今日この頃。みなさんいかがお過ごしでしょうか。

今日は重大(?)なお知らせがあります。こんな小さなスペースに書いて申し訳ない(?)ですが、今号を最後に私は編集長を退任し、編集スタッフになります。

なんだか寂しいけれど、1年間編集長という大きな役を務めさせていただけて、本当に光栄でした。最後までついてきてくれたみんな、ありがとう。

次号からは新・編集長が誕生します。どうか今後もあたたかく筑スポを見守ってください。そして、筑スポは体育会のみなさまの、さらなるご活躍・ご健闘をお祈り申し上げます。

（上杉織美）

発行所/筑波大学体育会
（TEL.029-853-2589）
発行人/古谷 真悟
編　集/筑波スポーツ編集部
tsukusupo@hotmail.co.jp
責任者/上杉 織美（編集長）

編集スタッフ
◎編集長
上杉　織美（日日3年）
◎主務
大庭　夏海（人文2年）
◎会計
斉藤　千絵（比文4年）
◎広報
小島　菜奈美（資源3年）
有田　和晃（シス情2年）
田村　俊和（シス情2年）
本間　詩織（体育4年）
萩尾　奈緒香（社会4年）
明本　彩美（比文3年）
矢畑　冴佳（人文2年）
湯地　遼（人文2年）
小峰　朱理菜（人文1年）
三浦　加奈絵（比文1年）